

近代土木遺産としての旧函館軍事要塞跡地の現状

Current State of Hakodate Military Fortress Site of Civil Engineering Heritage

函館市土木部 ○正会員 大久保 市郎 (Ichiro Ohkubo)
 函館産業遺産研究会 富岡 由夫 (Yoshio Tomioka)
 (株) ドーコン フェロー 進藤 義郎 (Yoshiro Shindo)
 (株) ドーコン 正会員 小林 竜太 (Ryuta Kobayashi)

1. 序 論

旧函館軍事要塞（以下、函館要塞）は、日露戦争を控えた西暦 1898（明治 31）年に対ロシア防備のために旧陸軍が函館山に建設した軍事施設である。要塞建設の目的は、当時交通面、産業面から北の重要拠点とされていた函館の港湾防衛であり、ロシアのウラジオストック艦隊による襲撃に備えて建設されたものである。要塞施設は貴重な歴史的戦争遺跡であり、また、当時の土木技術の中でも高度な技術を持って建設された建造物であることから土木遺産としても高い価値を有している。函館要塞は土木学会が認定する重要土木遺産として位置付けられており、特に千畳敷砲台に関しては国指定重要文化財に相当する貴重な遺構であるとして評価されている¹⁾。

このような背景から、函館要塞はその歴史的あるいは文化財的に価値ある近代土木遺産として注目されており、後世に伝承すべく保存対策や教育資源、観光資源の 1 つとしての利活用が強く望まれている。

本論文は、函館要塞の歴史的意義から各施設の保存状態について記述し、今後の利活用を目的とした修復整備に対する函館市の取り組みについて述べる。

2. 函館要塞の概要

日清戦争の終結後、予想される日露戦争に備えて東京湾を皮切りにして日本各地で要塞施設の建設が行われた。「要塞」とは、1895（明治 28）年に制定された「要塞司令部条例」によると「永久の防御工事を行って守備を全うする地」と定義されている。また、後の 1899 年（明治 32）年に制定された「要塞地帯法」によると「要塞地帯とは国防の為に建設した諸般の防御建造物の周囲の区域」とされている。つまり、防御、守備、国防という 3 つのキーワードが示すように要塞は日本の国土を防衛するための軍事的な防御施設であったと云える。ここで、平時から戦略戦術上の重要拠点に堅固に構築された要塞は特に「永久要塞」と呼ばれている。

函館要塞は、津軽海峡を一望できる函館山（標高 334m、臥牛山とも呼ばれる）が、その軍事的な優位性が評価されて 1897（明治 30）年に要塞建設命令が下された。函館要塞は東京湾以北で唯一の軍事要塞であり、北海道の重要拠点とされていた函館の港湾防衛を確実に機能させることが要塞建設の目的であった。これにより翌年の 1898（明治 31）年に要塞建設工事が着工し、その後 4 年余りの歳月を費やして日本国内で 10 番目となる永久要塞として 1902（明治 35）年にその大部分の完成をみるに至っている。表－1 には日本国内における永

表－1 日本国内の永久要塞一覧

Num.	要 塞 名	起工年月	竣工年月
1	東 京 湾	明治 13. 6	大正 10. 8
2	対 馬	明治 20. 4	明治 39. 5
3	下 関	明治 20. 9	明治 33. 12
4	由 良	明治 22. 3	明治 38. 3
5	広 島 湾	明治 30. 3	明治 36. 12
6	芸 予	明治 30. 3	明治 35. 2
7	佐 世 保	明治 30. 9	明治 34. 11
8	舞 鶴	明治 30. 11	明治 35. 11
9	長 崎	明治 31. 4	明治 33. 12
10	函 館	明治 31. 6	明治 35. 10
11	基 隆	明治 33. 3	明治 38. 6
12	膨 湖 湾	明治 33. 4	明治 38. 4
13	鎮 海 湾	明治 37. 8	明治 37. 12
14	永 興 湾	明治 38. 2	明治 38. 8
15	旅順大連	明治 37. 9	明治 40. 8



図－1 函館要塞の主要施設位置図

表－2 函館要塞の砲台施設一覧

砲台名	砲台種	備砲および門数
御殿山第一砲台	砲戦砲台	28cm 榴弾砲×4(2)
御殿山第二砲台	砲戦砲台	28cm 榴弾砲×6(3)
薬師山砲台	側防砲台堡壘	15cm 臼砲 ×4(2)
千畳敷砲台	砲戦砲台	28cm 榴弾砲×6(3)
	側防砲台堡壘	15cm 臼砲 ×4(2)
立待堡壘	側防砲台堡壘	9cm カノン砲 ×4(2)

※括弧内は砲座数を示す。

久要塞の一覧を示している。函館要塞は、御殿山、千畳敷、薬師山、立待岬、入江山および穴瀬岬に各種の要塞施設が配備されている。図-1には主要な要塞施設の位置図を示している。軍事要塞において最も重要なのは砲台であるが、砲台は任務の目的により 1) 砲戦砲台、2) 要撃砲台、3) 補助砲台、4) 側防砲台に区別され、射撃と防御機能によってはさらに堡塁、砲台、堡塁砲台に区別される。函館要塞は敵艦船の侵入を防ぐために遠方から攻撃する砲戦砲台と、上陸した敵を撃退するための側防砲台から構成されている。御殿山第一砲台、御殿山第二砲台、千畳敷砲台は砲戦砲台であり、薬師山砲台、立待は側防砲台堡塁である。中でも千畳敷砲台は函館要塞の中で最も規模が大きく、砲戦砲台と側防砲台堡塁の双方の機能を有していたとされている。なお、砲台の建設にはフランス式の築城技術が採用されており、これは砲台を構築し、その側に掩蔽部を配置する方式である。表-2には函館要塞の砲台施設の一覧を示している。これより、函館要塞には榴弾砲、臼砲、カノン砲の合せて計 28 門の砲台を配置していたことが分かる。大砲の一例として 1922 (大正 11) 年に撮影された御殿山第二砲台の 28 cm 榴弾砲の設置状況を写真-1 に示した。

3. 各要塞施設および跡地の概要と現状

3. 1 御殿山第一砲台

御殿山第一砲台は、函館山頂上の展望台や各放送局の中継所周辺に位置している。御殿山第一砲台には、当時 28cm 榴弾砲 (砲戦砲台) が 4 門備えてあったが、現在は NHK や HBC 中継所の直下に位置しているため砲座は確認することができない。しかし、地下式掩蔽部 (通路、砲具庫、物置等) は展望台の駐車場下に現存しており、現在でもその内部は確認することができる。しかしながら、損傷度合いは小さいものの整備が成されていない状況であるため、要塞遺構として保存されているとは云えない状態にある。写真-2には御殿山第一砲台跡地の現況写真を示している。

3. 2 御殿山第二砲台

御殿山第二砲台は、函館山頂上付近のつつじ山駐車場に近接して位置している。御殿山第二砲台には、当時 28cm 榴弾砲 (砲戦砲台) が 6 門備えてあった。砲座は現在もそのままの形で保存されており、砲床にテーブルやベンチが設置され公園として一般に公開されている。しかしながら、各砲座間に設置されている地下式掩蔽部は内部の壁煉瓦部が凍害により大きな損傷を受けており危険であるため立入りが禁止されている。地上式の砲具庫や弾薬庫も残存しているが、これらも損傷が激しく、その一部ではアーチ天井部が崩落している箇所も見受けられる。また、建設当時に運搬路として使用されていたと考えられる石積みのアーチトンネル (道内でのこの種の石造アーチ構造物は大変珍しく貴重な遺構である) も残存しているが、堆積物が多く、内部の側壁が一部崩落していることから立入りが禁止されている。写真-3には御殿山第二砲台跡地の現況写真を示している。

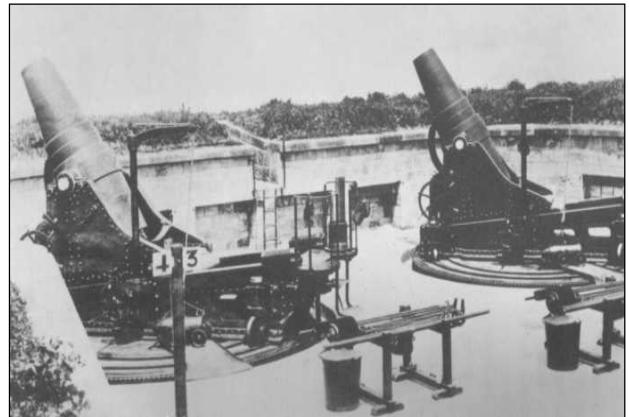


写真-1 御殿山第二砲台 28cm 榴弾砲 (函館市図書館所蔵)

写真-2 御殿山第一砲台の現況写真

御殿山
第一砲台



地下通路



地下砲側庫

写真-3 御殿山第二砲台の現況写真

御殿山
第二砲台



砲座および砲床



石積みアーチトンネル

3. 3 薬師山砲台

薬師山砲台は、函館山散策路の終点に位置しており、現在は一般公開されている。薬師山砲台は、御殿山第一砲台の補助的な役割を果たしたとされる砲台であり、砲座（15cm 臼砲、側防砲台堡壘、当時 4 門）、棲息掩蔽部（砲具庫および砲側庫）、貯水槽、濾過層、監守衛舎、観測所により構成されている。棲息掩蔽部の腰壁が凍害による劣化を受けており、また、連絡路や遊歩道の石垣が一部で崩落はしているものの、遺跡としての保存状態という観点からは、いずれも比較的良好な状態にある。

写真-4 には薬師山砲台跡地の現況写真を示している。

3. 4 千畳敷砲台

千畳敷砲台は函館要塞の中でも最も規模が大きく、函館山の背の部分に位置している。砲台跡地も 2 箇所現存しており、28cm 榴弾砲（砲戦砲台）を備えた第一砲台（6 間）と 15cm 臼砲（側防砲台堡壘）を備えた第二砲台（2 門）に区分されている。第一砲台には当時 3 箇所の砲座が設けられていたが、現在はその中央部の砲座上に JR 無線通信所施設があるため 2 箇所の砲座のみが確認できる。また、第一砲台、第二砲台にはそれぞれ観測所が近接して位置している。いずれも観測座は凍害による劣化が激しいが、その地下にある通信室は比較的良好な保存状態にある。これら以外にも千畳敷砲台には様々な要塞施設が数多く残存しており、整備が成されていない状況ではあるが、施設自体はいずれも比較的良好な状態で保存されている。特に、千畳敷砲台の最南端には戦闘司令所がある。戦闘司令所は当時砲兵指揮官司令所とも呼ばれ、各砲台からの情報収集や司令を発する施設として機能したものであり、函館軍事要塞の中枢を担う施設であったと考えられている。現在は、上屋は残されておらず（当時は木造の上屋であったと推定されている）、また、下部構造や地下施設（掩蔽部、待機室、通信室）では劣化の進行が見受けられるものの、ほぼ当時のままの完全な形で現存している。地下式構造の戦闘司令所は、明治に建設された日本国内の要塞施設の中では非常に珍しいとされていることから函館要塞施設の中で最も貴重かつ重要な遺構であるものと考えられる。写真-5 には千畳敷砲台跡地の現況写真を示している。

3. 5 入江山観測所

入江山観測所は、入江山散策路の終点（つつじ山駐車場から千畳敷砲台に繋がる道を徒歩で 20 分程度）に位置している。観測所に向かう途中には訓練用の八八式海岸射撃具砲座が確認されるが、これは明治期ではなく昭和初期に建設されたものである。入江山観測所は、観測座とその地下にある電話室から構成されている。観測座のコンクリートは凍害による損傷が激しく、相当な深度まで割れが達している。また、地下構造の電話室も側壁やアーチ天井の損傷が激しく、特に天井の中心部はアーチを二分するような大きな割れが生じており非常に危険な状態にある。よって、観測所上部の見学は可能であるが、地下構造部は危険のため立ち入りが禁止されている。

写真-6 には入江山観測所跡地の現況写真を示している。

写真-4 薬師山砲台の現況写真

薬師山砲台



砲座および砲床



棲息掩蔽部

写真-5 千畳敷砲台の現況写真

千畳敷砲台



戦闘司令所



地下砲側庫

写真-6 入江山観測所の現況写真

入江山
観測所



観測座

3. 6 立待保塁

立待保塁は鞍掛山の山頂付近に位置しており、砲台を有する要塞施設の中では最も遅くに建設を開始した施設である。立待保塁は 9cm カノン砲を 4 門備えた側防砲台保塁であり、首線方向は市街地に向いている。2 門編成の第一砲座と第二砲座があり、いずれも現存している。砲座の床はコンクリート製の頑丈な床版構造であるが、堆積した腐植土上に樹木や雑草が繁茂しており、コンクリート表面は露出していない状態になっている。立待要塞には砲台保塁の他に照明所（電灯）や 3 箇所の低地観測所があるが、これらはほぼ完全な形で現存している。

写真－7 には立待保塁跡地の現況写真を示している。

3. 7 穴澗低地観測所

穴澗低地観測所は、函館山の裏側にあたる穴澗岬に位置している。地形的に非常に厳しく、海側に迫り出した断崖の上に建設された施設であり、建設工事は困難を極めたものと推察される。主要な施設は、照明所（電灯）と低地観測所であり、照明所の構造は立待保塁のそれと全く同一のものである。穴澗要塞には計 3 箇所の低地観測所が配備されているが、いずれも観測座もその構造や輪郭が明瞭であり、保存状態は比較的良好である。しかしながら、穴澗要塞までの連絡路が整備されておらず、現在は立入りが禁止されている。写真－8 には穴澗低地観測所跡地の現況写真を示している。

3. 8 その他の遺構（軍用橋）

函館山登山道の入口（函館山管理事務所）周辺に北海道内ではその存在が珍しい石積みアーチ橋（軍用 1 号橋）が現存している。（写真－9）これは要塞建設時に工事用道路（資材運搬用）として架橋された軍用橋であり、砲台や砲身あるいは建設資材の重量物の運搬に耐えられるように三重構造のアーチリングとなっているのが特徴である。現函館公園内には道内最古とされる石積みアーチ橋（白川橋：明治 14 年架橋）が現存しているが、軍用 1 号橋の積み石と類似していることから、これらは同時期に建設された可能性が高いと考えられている。

4. 函館市の要塞跡地整備に対する今後の取り組み

函館市では平成 14 年度に策定した「函館山緑地整備計画」に基づいて、函館要塞を利活用可能な施設として今後段階的に修復整備を実施していく方針である。現在は主要な要塞施設の現況調査が完了し、保存および活用を具体的にどういった形で進めていくかを検討している。

このような歴史的遺産を保存するための修復・復元計画を議論するにあたって、まず最優先に考えるべきことは文化財としての価値をいかに損なわないようにすることである。文化財としての価値とは建設当時の材料や構造および技術を可能な限り多く、かつ完全に近い形で残すことによって継承されるものであるが、同時に安全性の確保や維持管理も必要となり、これが重要な課題である。

単なる文化財としての価値だけではなく、安全性や維持管理を含めた三者間でバランスのとれた保存対策を講じる必要があるものと考えている。

写真－7 立待保塁の現況写真



砲座

写真－8 穴澗低地観測所の現況写真



観測座

写真－9 軍用 1 号橋の現況写真



石積みアーチ橋

5. まとめ

函館要塞は歴史的かつ文化財的に非常に価値ある近代土木遺産であり、建設当時の土木技術を知る上でも極めて貴重な遺構である。2001 年には北海道遺産にも選定され、その保存および活用が期待されている。軍事遺跡はこれまで「負の遺産」として受け入れられてきたが、歴史上の事実として後世に伝承していくことが重要である。日本国内における軍事要塞施設の整備事例は未だ少ないのが現状であるが、地域の経済的発展にも寄与できるような活用方法を検討していきたいと考えている。

【参考文献】

- 1) 日本の近代土木遺産～現存する重要な土木構造物 2000 選, 社団法人土木学会, 土木史研究委員会 (委員長: 佐藤 馨一), 2001.3.
- 2) 富岡由夫 他: 「函館要塞」山頂部の要塞施設 (1) ～(6), 函館の産業遺産, 函館産業遺産研究会
- 3) 井澗 裕: 函館要塞の 100 年～知られざる土木遺産の軌跡～, 函館の産業遺産 No.5, 函館産業遺産研究会, pp.2～13, 2000.7.